セッションⅠ
「文学のなかに身分感覚を読み解く」
【趣旨】

岸　本　美　緒*

本セッションは、第13回国際日本学シンポジウム「感覚・文学・美術の国際日本学」の第一セッションとして企画された。「身分感覚」という語は、本シンポジウムを共催した科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）「身分感覚の比較史的研究」の課題名から取ったもので、一般的な用語ではないが、その目指すところは、以下のような課題である。

一般に「身分」といえば、法制上規定された身分制度を指すことが多く、従来の身分研究は、身分関係の法律の変遷や、その背後にある経済的支配関係に研究の重点を置いてきた。しかし、身分制度が社会のなかで生きた作用を発揮する過程はより複雑である。衣服、乗り物、紋章などの明確な身分的表徴はむろんのこと、言葉遣いやしぐさなどにおける微妙な相違が、それぞれの身分らしさを演出する。人々はそれらを駆使して自らの身分を示し、或いは身分的な上昇を図る。

人々の振る舞いや言葉遣いによって絶えず紡ぎだされる身分関係を、その生きた様相においてとらえることが、「身分感覚」研究の課題である。すなわちここでは、人々をしばる堅い枠のようなものとして身分制度をとらえるのではなく、人間相互の行為と認知の総合的な結果として、身分というものを動的に考察しようとするのである。

本セッションは、その身分感覚を「文学のなかに」読み解こうとするものであるが、なぜ「文学」なのだろうか。社会的上下関係を示す言葉遣いやしぐさなどは、当時の人々にとっては空気のように日常的なものであるが故に、記録されることが少ない。当時の人々は、必ずしも言語化することなく、何となくの上品さや下品さといった「雰囲気」「感じ」において、相手の社会的地位を認識する場合が多いともいえよう。しかし、小説や戯曲などの文学においては、登場人物の生き生きとした造型は、様々な小道具や言葉遣い、態度の描写と切り離せないものである。小説や戯曲には、そうした表徴や行為の意味が明示的に書いてあるわけではないが、ルールブックがなくてもゲームを見ているうちにそのルールが感得されてくるように、読者が、文学を通してそうした身分的行為の意味を読み解くことは可能なのである。

むろん文学はフィクションであるが、当時の読者にとってそれが面白いものであったということは、そこに一定程度共有された社会感覚が存在したことを示している。そうした共通感覚あればこそ、冗談や皮肉も含めて、読者は文学を享受できる。そして後世の読み手にとってはむしろ、文学こそが、当時の共通感覚に接近する窓口となるのである。

本セッションの報告者はいずれも歴史研究者であり、文学を題材とすることは一つの挑戦であったが、歴史学と文学・思想研究との対話のきっかけとなることを目指して企画させていただいた。

当日は猛暑にもかかわらず、多くの方々にご参加いただき、活発な討論が行われた。司会者、報告者の方々をはじめ、準備・会場設営を担当してくださった皆さん、及び参加者各位に心より御礼を申し上げたい。

＊お茶の水女子大学大学院教授